

古き加賀

室は屏曰は

元禄の加賀の古俳人

を思ふ<sup>ことほ</sup>意山を望むが

物<sup>の</sup>佛詣の<sup>集</sup>し<sup>く</sup>兼業は

び暮した町々の昔の空気のなかに

枝、物の坊や句空おはきてあなことは、

同時

とし、  
うなものである。この龍大な<sup>うら</sup>りを見るや

録から天遊を直り、  
蒼虬、挿空、卓太まで

二

ココニ本ノ名ヲ入レル

きである。加賀に於ける大傑凡兆のごときも  
のは甚道を押し退けるくらゐの実力があり、

三

様に目録本の俳諧を三令りたその一つを頁う  
てあるものには思はれる。古き加賀はこの意味  
からも日本俳諧史の重要半ばを埋めても回  
いものであらう。

四

金沢市彦三一番丁

殿田良旅様

東京 大森

室は屏曰は

75